沖縄の遺骨収集米軍と交渉へ

取り残された二万体

日本政府が発掘作業計画

◇…【東京特電14日】沖縄の山野に眠る戦死者の遺骨を日本政府の手で収集しようという計画が、厚生所管方針約…◇

◇…事務局によってまとめられ、近く次官会議を通じて米側当局に申請される運びとなった。終戦後沖縄の遺骨…◇

◇…は住民の手で大部分が処理されたが、日本政府が組織的に遺骨収集を行うのは今度がはじめてである。…◇

沖縄の戦死者は軍人、軍属、民間人を合せて約十七万人余と推定されている。このうち十五万体は戦後住民の手で「ひめゆりの塔」「健児の塔」「魂魄の塔」など約四百カ所の納骨堂に納められ、氏名の分った約三千体は本土に送りとどけられたが、残りの約二万体は未回収となっている。これらの遺骨はおもに南部海岸地区の鍾乳ドウなど自然のホラ穴に埋れたり、山部山兵地帯の山奥に収容されたまま放置でゴウがをされたり大雨洪水にながされていたりして手つかずのまま になっている。

こんどの計画はこのうちとくに作業のやりやすい個所を中心に進められる計画だが、比較的作業が容易の場所は那覇市郊外の四カ所をはじめ豊見城、三和、具志頭、玉城、南風原、与那原各町村付近の三千五カ所で、収納可能な遺骨は少くとも二十三百体と推定される。南風原村近くの自然ゴウに納つた日本軍将兵は約二千、与那原町のホラ穴には千体が残されていると推定されている。

収集の計画では英軍、収集作業は主として琉球側にやってもらい、日本側はこれに必要な資金を支出するというのが、このための予算約四百万円はすで に米極東軍司令部に組込まれた。

府による遺骨収集を要望している。

石井厚生局長の話 北海道、愛知など沖縄戦での戦死者が多い各県をはじめ、現地側の資料も欲しいので計画をたてた。できれば現在県内にある納骨堂の整理もあわせて行いたい。

政府は原則的に了解を与えたと報道されているが、政府には今週中にも外務省に資料を提出、米当局との交渉を始めや沖縄遺族連合会では米回収の際骨中には多数の沖縄関係者も含まれているだけに、日本政府の遺骨送還を強く要望している。

石井厚生局長の話 北海道、愛知など沖縄戦での戦死者が多い各県をはじめ、現地側の資料も欲しいので計画をたてた。できれば現在県内にある納骨堂の整理もあわせて行いたい。

1956年（昭和31年）3月13日琉球新報

悲運の英霊

21年ぶりに成仏

約70体を収骨

遺族 遺骨だきしめ泣く

糸満町

戦後二十一年間も、ごうのなかで「帰還」を叫んでいた英霊たちに、終戦記念日（十五日）を前によろこばしい成仏する日が訪れた。厚生局は、十一日午前十時半から糸満町宇江城にある「山雨の塔」の真下のごうで遺骨を収集した。同ごうは元日本軍第二十四師団（山部隊）の雨宮師団長らが自決したところで、山部隊生き残りの砂田又一郎さん（八七）＝糸満町＝や遺族ら十数人が協力して約七十体を収骨、遺族たちはごうのなかの中で、打ちはてた遺骨をだきしめて、悲しみを新たにした。

この日、宇江城のごうの付近には、遺骨収集が行なわれることを知った遺族たち約十人が、朝早くから集まり、厚生局職員がくるのを待った。さる沖縄戦で夫と二人のむすこを失った大里村出身の三七歳の未亡人、睦寛カメさん（ごうで収骨）もその一人。カメさんの長男の長悦さん（一〇）は、一九四四年ごろ（昭和十九年）、疎開先の那覇市で、空襲のため行方不明になった。カメさんは、三男の長悦さんと二男の三明さんを沖縄に残して嫁ぎ先の大里村に帰り、山部隊に入隊した夫の長悦さんをうしなった。



米満町宇江城のごうで遺骨収集をする遺族や厚生局職員ら



首里攻防戦、南部への後退と移動を続けた山部隊に入隊した長悦さんは、同部隊と行動をともにし、四五年六月には南部戦線をさまよう末期のごうにたてこもったという。しかし、長悦さんのそれ以後の行動はわからなくなった。カメさんは沖縄に引き揚げたあと、長悦さんの「死亡公報」を受けとった。夫の長悦さんの死亡公報とともに。また、沖縄に残した他の二人のむすこも戦死した。

カメさんは、この日砂田さんから山部隊の最期のもようを聞き、涙を新たにし「せめて骨だけでも自分の手でひろいたい」と、砂田さんらとともにごうにはいった。

ごうの中には、折まみれになった頭がい骨や手の骨などが発見された。いずれも茶かっ色に朽ちておりなかには骨にヒビのはいっているものやホロボロになったものもあった。また、銃剣といっしょに埋まれた軍靴の紐や銃剣帯、手投げ弾、鳥のみ茶わんなども散乱し、戦争の悲惨さを物語っていた。

カメさんら遺族は、涙にまみれながら遺骨にしがみつき、「こんなになって……」と泣きくずれていた。また、砂田さんは、変わりはてた戦友たちの姿を前に「首里の防衛戦で、戦争を終結すればこんなことにならずにすんだのに……。自分は生き残ったが、戦友たちは二度と戻ってこない……」と感慨無量の面持ちだった。

厚生局は、この日収骨した遺骨のうち、遺族のわかるものは、遺族に引きとってもらい、身元のわからない英霊たちは、那覇市繁多川の中央納骨所に納骨することにしている。

収骨前、涙ながらに戦死したむすこの思い出を語るカメさん

1966年（昭和41年）6月12日琉球新報

遺品、数百を収集

沖縄戦戦没者遺骨収集 3日に全作業終了

3/4

さる一月二十六日から始まった厚生省の第三次沖縄戦戦没者遺骨収集は、糸満市摩文仁を中心に壕、原野などで日本遺族会、戦友会、学生、地元住民の協力を得て進められていたが、三日全作業日程を終了した。これまでに遺骨千百十九柱のほか印かん、万年筆、食器類など遺留品数百点が収集された。遺骨は四日午前、那覇市識名の中央納骨堂に納められる。また遺留品で名前の刻まれているものは厚生省に持ち帰り公報などで遺族捜しをすることになった。この遺骨収集は国が四十八年に始めた戦後処理遺骨収集三カ年計画の最終年。しかし県生活福祉部援護課の推定だと県内の未収集骨はまだ二千八百柱もあり、各市町村から埋没壕発掘の要望が相次いでいるところから厚生省は遺骨収集計画を延長する意向だという。

遺骨収集団（団長・福多正治厚生省援護課第四班長）はこの四十日間で那覇市石嶺の石嶺壕を皮切りに糸満市真壁の第五砲兵司令部壕など七埋没壕を重機を駆使して発掘、二百四十八柱を収容した。遺骨収集団の推計だとこれらの壕に総計四百十一柱の遺骨が埋没していると見ていたが結果は約半分の遺骨しか収集できなかった。

一方、同遺骨収集団には日本遺族会、同青年部、戦友会、日本青年遺骨収集団、近畿大学を中心にした関西学生遺骨収集班など協力隊四十八人が合流、前期後期の二班にわかれて摩文仁の海岸から真栄城、米須、真壁一帯の原野、未踏査地域でくりかえし遺骨収集を行い八百七十一柱を収容した。

1976年（昭和51年）3月4日琉球新報

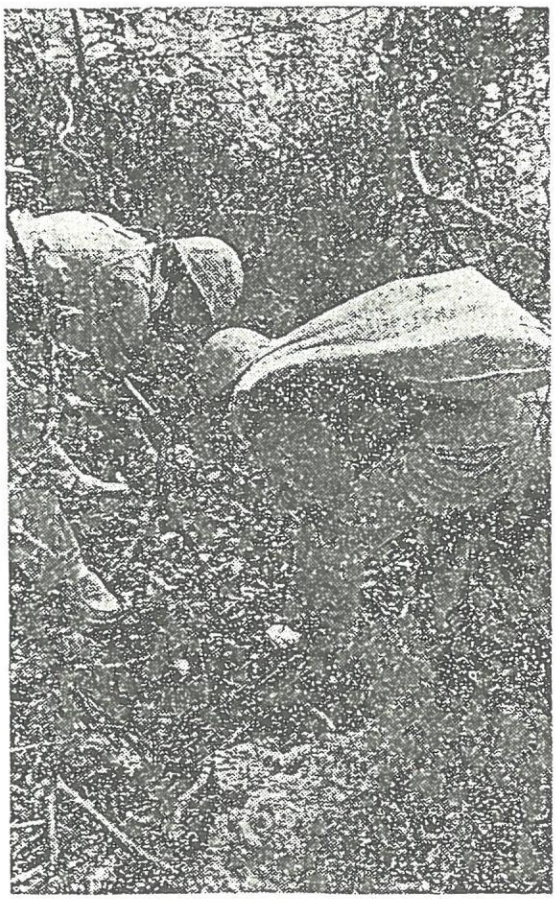
遺骨収集始まる

33年忌を来年にひかえ

12.13 タイムス(夕) (2-1)

摩文仁丘の周辺で

県生活福祉部援護課



33年忌を来年にひかえて13日から始まった摩文仁丘周辺での遺骨収集

健児之塔近くで三柱を発見

沖縄戦の終えんから三十一年余、日本側旧軍人軍属、一般住民十八万八千人余が沖縄で死んだといわれ、これら戦争犠牲者たちの三十三年忌も来年夏に迫っているが、沖縄各地の山野、埋没壕には未だ多くの遺骨が取り残され、収骨の手を待っているという。さいきん、宅地造成、道路建設が進むなかで、遺骨が続々発見され、県生活福祉部援護課によると、こうした形での発見、収骨されるケースは、このところ毎月二十体を下らないが、十三日午前から収集作業が行われた。

同援護課は、十三日午前九時から県職員、糸満市摩文仁の地元民、奉賛会のメンバーなど総勢二十人からなる遺骨収集班（班長・西村援護課長）を編成、摩文仁丘周辺で遺骨収集を行い、朝のうち健児之塔南側の厚生では完全な形で残っていた三柱の遺骨を発見、収骨した。この日は、摩文仁丘の南側の斜面と裾野に広がる原野一帯がくまなく調査されたが、今回の収骨作業は十七日まで毎日二十人規模で続けられる。

これは、今年初めに行われた本土の遺族関係学生らの踏査の結果、摩文仁丘周辺に遺骨が取り残されていることが確認され、これに基づいて海え込みを待って開始された。沖縄での遺骨収集は、厚生省による埋没壕を中心とするのが毎年一～三月に行われているほか、援護課が一般からの通報などに基づいて、常時収骨態勢をとっており、合わせて十七万一千二百四十四柱を収骨している。

1976年（昭和51年）12月13日沖縄タイムス

旧日本軍 野戦病院壕 33年目に掘り当てる

区民の証言手掛りに 軍靴や万年筆も

豊見城村保栄茂

厚生省の遺骨収集団

「みつかった」と喜ぶ区民。七日から始まった厚生省の壕探索、遺骨収集作業で、豊見城村の保栄茂にあるといわれていた旧日本軍野戦病院壕が九日午後一時すぎ、みつかった。壕は地中深く埋まっていて、そこが陸軍壕であったことを示すものは一体の遺骨と多数の不発弾だけ。区民は「昨年の三十三回忌には間に合わせてもうかばれることだろう」とわがことのように壕の発掘を喜んだ。実に三十三年目にして姿をみせた壕なのである。

地雷、銃弾がゴロゴロ

壕の発掘は大変な作業だった。七日から区民らの証言をもとにして発掘作業は始まった。初日はトロッコ用のレールやコンクリート片がみつかり、すぐ発見できるものと関係者は考えていた。

しかし、八日は壕跡を示す証拠品は一つみつからず、逆に壕内に入ったとか、壕内の真人と振舞したという区民の証言で場所を変え、掘る角度を変えた。

保栄茂の野戦病院壕と呼ばれているのは区民の証言による。厚生省の資料も区民の証言で作成され、それには壕の全長六十㍍、壕内に入ったとある。

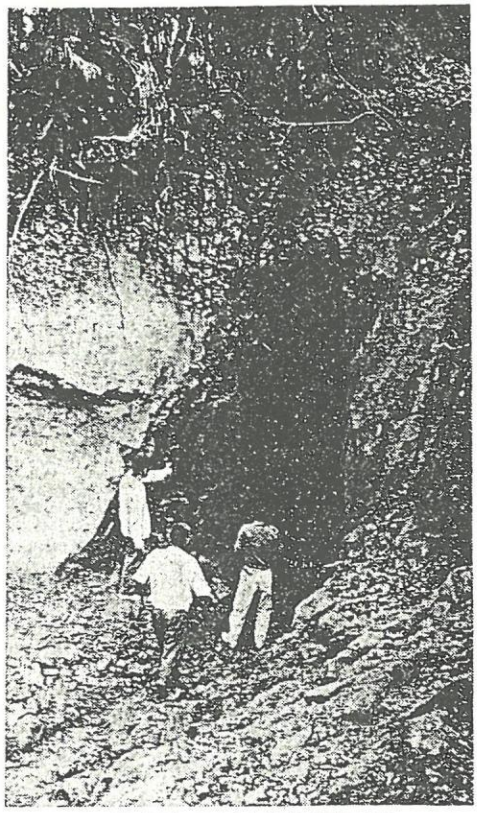
保栄茂の部落を一望に見渡せる小高い丘にあり、クシノモウ（後野毛）と呼び、そこには大きな石を置いただけの墓所があった。区民の多くは墓所を目印にして、壕の出口付近を証言した。ソウシ人ほどの軍人が収容していた——

午後一時すぎ、鳴った軍靴がユンボーの掘り出した土の中から出てきた。次いで遺骨、そして小型地雷、投擲弾など。さらに「間もなく」の万年筆、不発弾が多いことから、この日の作業は午後四時すぎ、中止となり、十日、自衛隊の不発弾処理班の手で本格的な調査が行われる予定。

当統括責任者区長は当初、みつからない壕に「私たちがありもしない壕を申告して発掘させているようで」と悩んでいただけに、発見を喜んだ。「これでみな安心もうかばれることでしょう」。

壕は地中深く埋まり、壕を掘り返していくことは大変な作業になりそうだ。遺骨収集に当たる厚生省の伊村団長は、今後の作業については検討を要するという。区民は、ここまできたのだから本格的に掘って遺骨を収拾して欲しい——と訴えている。戦争を体験した区民にとっては戦後からこれまで心にひっかかっていた壕だけに、この思いは強いようだ。

「少なくても十五人、多くみて六十人は壕内で死亡した」と証言している。



33年目にして姿をみせた保栄茂野戦病院壕

1978年（昭和53年）11月10日沖縄タイムス

13の壕から195柱

伊江島の収骨作業も終わる

"胸のつかえ取れた"

あす芳魂之塔で慰霊祭

【伊江】二月十日から始まった厚生省沖縄戦没者遺骨収集団（福多正治団長）の伊江島収骨は五日終了した。軍民合わせて三千五百人が犠牲となった激戦地・伊江島。村民や県などによりこれまで収骨が続けられてきたが、約八百九十一柱（推定）が地下深い壕や壕で眠っている。「遅すぎた。だがこれでやっと戦後が終わる」と村民や遺族らは約一カ月の収骨作業を見守った。この日同村字東江上の泊原自然壕からは村民と旧日本兵合わせて二十一柱がみつかった。狭い壕内には遺骨が散乱し、軍刀や軍靴とともに女性のくし、大工道具ののみやかんなどが発掘され、激戦の中の運命共同体を印象づけた。伊江島収骨は十三カ所（二十六カ所中）の壕で約百九十五柱に上った。だが敗後三十九年。依然として埋没壕に犠牲者は人知れず眠っている。伊江島では六日に慰霊、七日午後一時、芳魂之塔で慰霊祭がとり行われる。

約900柱 まだ地下に

牛のなき声がのどかに聞こえてくるだけにあった。頑丈な石灰岩。内一帯、上部は黒くすすけていた。泊原。自然壕は牧草の下約七メートル、一部の奥行き約十メートル、幅は二メートル前後。チョン、チョン、チョン…。水滴が落ち、作業用の白熱電球がムッとした暑さをおこす。

ポッカリ空いた壕内に遺骨は散乱していた。くだけた頭がい骨から遺体数の確認も困難なほど。「自決か米軍の攻撃によるものかはわからないが破壊力の強い爆薬だったのだろう」と作業員。

このほかガスマスク、飯ごう、くし、カミソリ、歯ブラシなど。印鑑一個、認識票二個、ともに名前の確認はできない。

「もしやと思ってきました」と防衛隊で戦死した夫・徳秀さんの遺骨を求めて訪れた玉城栄子さん（六三＝那覇市繁多川一ノ四ノ一八。兄ら親類三人に伴われ、昼すぎに伊江港に着き、泊原壕へ。栄子さんは毎年の慰霊祭に参加、今回遺骨の確認ができないものかと訪れた。

「金歯があった。どこでいつ死んだかもわからないが」と作業を見守る。しかし身元のわかる遺骨はなかった。さらに今回の収骨作業で発掘された遺骨を納める芳魂之塔に赴いたが、夫の遺骨を見つけることはできなかった。涙々と塔に頭を垂れ、引き揚げていった。

厚生省の舛田暎博担当官は「予定の収骨作業は一応終わった。村民すべてが遺族であり、役場を含めみなさんの協力で作業は順調にいった。民家の近くに埋没壕が残っているなど戦争の傷跡の深さを新たにした」と語っていた。厚生省の伊江島遺骨収集は来年度も続けられる。

玉城金蔵村長の話　長い間の村民の願いだった村外の遺族の方々にとって、あせる心はよけいに強かったろう。十一年前厚生省に収骨を要請しやっと実現した。胸のつかえがとれた思いだ。伊江島での戦没者は村民千五百人、日本兵二千人とも言われているが、実数はわからない。上回っていたのではないか。占領後村民はすべて渡嘉敷や座間味に収容された。二年後島に戻りさっそく収骨を始めた。ただ深い壕などは私たちの手には及ばずこの日の来ることを待ち望んでいた。



伊江島最後の泊原の自然壕から遺骨を収集する厚生省遺骨収集団（５日午後、東江上で）

1983年（昭和58年）3月6日沖縄タイムス